

日本科学者会議宮崎支部事務局連絡先 : 〒889-2192 宮崎市学園木花台西 1-1

宮崎大学教育文化学部 野中善政 気付

電話/ファックス 0985-58-7511、[電子メール miyazaki@jsa.gr.jp](mailto:miyazaki@jsa.gr.jp)

郵便振替口座 02010-4-15455 加入者名 日本科学者会議宮崎支部

-
1. 10月4-5日 九州シンポ 小玉報告
 2. 1月30日 第4回読書会
 3. 2月11日 第65回憲法と平和を考えるつどい
-

1. 第26回九州・沖縄シンポジウムについて

10月4日～5日、九州大学六本松キャンパスにおいて開催される。宮崎支部からは、第1部「九州の環境問題」で、小玉直也氏（赤江浜を守る会）が「宮崎海岸の行方」と題して、海岸侵食の原因と推定される海岸コンクリート構造物の新たな建設計画を阻止する取り組みについて発表し、第4部「大学の現状と課題」では、野中・平野による試論「運営費交付金削減は国立大学にどのような影響を及ぼすかー宮崎大学財務諸表の分析に基づいてー」を発表した。後者の発表内容については先の「事務局ニュース」で紹介したので、今回は前者の発表内容を以下に報告する。

宮崎の海岸の行方 報告者 赤江浜を守る会 小玉直也

はじめに

本日は、日本全国で海岸侵食が広がっている問題に触れたいと思います。

地球環境がつつぎと破壊されている事が大きな問題になっています。その大きな原因が人類の経済活動にあることが挙げられ、ヨーロッパをはじめ世界中で私たちが自然とどう向き合うかが緊急の課題となっています。

日本でも各地で自然を保全する運動が広がり、特に最近では公共事業による自然破壊に対して諫早湾や川辺川ダムなど画期的な一歩が踏み出されています。

宮崎では綾の照葉樹林を守る運動など進んでいる面もあるのですが、残念ながら海岸線への公共事業での自然破壊は生活圈との距離もあり進められ、苦勞しながら保護運動をしている最中です。

しかし、数十年前には森林行政が杉一辺倒の公共事業をすすめていましたが、今日、自然の照葉樹林が見直されています。私たち宮崎の海岸線の運動をしているメンバーも、遠くない将来、コンクリートで固めていく海岸行政から自然の砂浜が重宝がられる流れに変わることを信じて長い目で地道に取り組んでいます。

申し遅れましたが、私、小玉直也は 1971 年宮崎県生まれです。宮崎産業経営大学を卒業後、大阪で就職しボランティアにかかわりはじめ、ロシアのナホトカ号座礁の重油除去ボランティアや諫早湾には有給休暇をとり参加しました。沖縄名護市の海上基地建設住民投票が行われていたので会社を退職しボランティアにかかわりました。2003 年はイラクのバグダットに高遠菜穂子さんとボランティア活動にとりくみ、2005 年はスマトラ沖地震で津波の被害にあったタイへ支援に入りました。昨年は宮崎の大学生を 8 人引率し中越沖地震で被災した新潟県柏崎市へボランティア活動に駆けつけました。

本日は宮崎で渚のある海岸保護の運動をしている「赤江浜を守る会」と「ひむかの砂浜復元ネットワーク」から宮崎の海岸の行方と運動の紹介をさせていただきます。

砂浜のメカニズム

まずは、海岸線に形成される砂浜について触れさせていただきます。山に入り川の上流に行くと大きな岩が多数見られます。下流に行くにしたがって岩が石になり小石になり、砂となり海へと流出し河口から砂浜が形成されていきます。

したがって、基本的には川の無いところでは砂浜も形成されにくいです。宮崎市の海岸線は大淀川、清武川、加江田川の 3 つの川から供給される砂によって住吉から青島にかけて砂浜が形成されています。

青島から南に下ると、砂浜ではなく国の天然記念物にも指定されている鬼の洗濯岩があり突浪川が形成している白浜海水浴場、堀切峠を越えて鬼の洗濯岩が続き、伊比井川が伊比井の砂浜を形成し、富士川が富士海水浴場の砂浜を形成しています。川がない海岸線はほとんど岩場になっています。この傾向は日本中でまた、世界の砂浜で共通の状況が見られています。

その川から流れてきた砂が波によって移動しながら砂浜を形成します。宮崎での波は太平洋での低気圧などから起こる風の影響をうけて波が発生し岸へとたどり着きます。ハワイと日本の間の場合は、うねりが発生して約 2～3 日かけて海岸に到達するといわれています。そして低気圧や台風が関東や関西の沖にあるときには宮崎には北うねりとして入ってきて砂は南へ、また沖縄や台湾沖に低気圧があるときには南うねりで砂は北へ移動します。そうやって川から流れてきた砂が横に移動して砂浜を長く形成していきます。

一年中休みなしに波が発生し海岸におしよせ続けるので、かなりの波のエネルギーとなり砂を移動させ長い砂浜を形成してきました。

自然災害

そんな中、大きな台風や嵐が海岸線を直撃すると砂はまとめて沖に移動し数百メートル沖でサンドバーといわれる砂山が海中にできます。そして沖に流れた砂がまた波の影響をうけてゆっくり岸へ移動していきます。自然災害で大きく移動した砂は、また自然の力で岸にもどり今日に至っています。

人災

そうやって海岸線の砂浜は 1000 年以上の長い年月をかけて形成されてきました。

そんな宮崎海岸の砂浜がいま、どんどんやせ細り消滅していっています。宮崎市青島海水浴場の砂浜は以前200m以上ありにぎわっていましたが、最近では大潮の満潮時には砂浜が5mくらいになっています。サーフィンの名だたるスポットとして挙げられていた木崎浜や一ツ葉海岸でもかなりの海岸浸食が進んでいます。その原因として一番大きな要因となっているのはコンクリート構造物を川や海に造り続け砂の動きを止めてしまったことが挙げられます。日本国中で川ではダムを、海には大規模な港や空港をつくってきました。

宮崎でも例外ではありません。一級河川として一番砂を供給してきた大淀川からの砂の流れを構造物が止めてしまったのです。70年代住民の反対を押し切り大淀川の南側に宮崎空港の滑走路を400m延長しました。そのことにより滑走路の北側と南側そして東側に砂がたまり滑走路から青島までの約10kmの砂浜が少しずつ痩せてきました。

その後90年代に大淀川北側に宮崎港の建設が始まり波よけ堤防が岸から1500mにわたって建設されました。この長いコンクリートは砂の横の流れを完全に遮断してしまい港の北側に位置する一ツ葉海岸は長い砂浜で有名なサーフィンポイントだったにもかかわらず、いまやコンクリートで護岸工事につづく護岸工事で自然の砂浜の面影は完全になくなってしまいました。

空港と異なり港の厄介なところは、前述したとおり太平洋上の低気圧の位置によりうねりが入り砂が南北に移動し港の中にも砂が堆積していきます。しかし、港には大きな船が入るために砂を毎年掘削し続けそれを太平洋の沖に捨てるという公共事業を続けました。そのため南に移動していた砂も阻害され木崎浜や青島の砂浜が、ここ10数年かなり早いスピードで痩せていっています。今後、20年から50年くらいで青島海水浴場のすべての砂浜が消滅するでしょう。いやもっと早くなくなるかも知れません。

このように、宮崎市の海岸では空港と港の建設により海岸での砂の動きを止めて、南北の砂浜が激減しています。

そして今、さらに大きな問題となっているのが県土木部河川課や国土交通省は海岸侵食の根本の原因に目を向けず、海岸侵食対策として災害復旧の名の下に空港の南側そして港の北側の海岸線に数十億円規模でつぎつぎにコンクリートを入れ続け、さらにその北側と南側の侵食を進めている悪循環が続けられています。そして新たに数百億円規模での巨大なコンクリートを海岸に入れる計画が出されています。

私が所属している「赤江浜を守る会」や「ひむかの砂浜復元ネットワーク」では新たな構造物による対策ではなく、自然の砂浜を守り復元する運動をしています。

その運動の様子の詳細を述べるとかなりの時間を要しますので簡略して触れさせていただきます、2004年に宮崎市赤江海岸に、約20億円かけて人工リーフというコンクリート構造物を建設する計画が出されました。その計画を知った地元住民や海岸生態系の保護研究をしている方をはじめ多くの海岸利用者は、長い年月をかけて侵食されていった海岸線を、ひと夏の台風災害による侵食として災害復旧計画が短期間に進められることに意義の声をあげ始めました。その後、赤江地区の砂浜がコンクリートに埋め尽くされることへの危機感から自然の砂浜を守ってしてほしいと運動が広がりました。

そこには10代20代30代の若者も多く見られ、計画の見直しの署名を集める際には1ヶ月

で30000筆を超える署名を前安藤知事に提出しました。また、赤江海岸に100人を越える若者で人間の鎖を作りアピールをしたり、宮崎市の繁華街を多くの若者がプラカードを持って音楽を奏でながら自然を守ってほしいと訴えました。工事着工時には工事車両の進入口に座り込みをして着工させないとりくみをするなど、宮崎の自然を守る若者の運動は広がり発展していきました。その後、工事は着工しましたが、工事期間中は入り口でテントを作り約4ヶ月間、運んでくる構造物やトラックをチェックしたり自然が壊されていく様子を記録していきました。

赤江浜を守る会の運動は、自然の権利基金の弁護士などのアドバイスをうけて住民監査請求にとりくみました。前安藤知事相手の裁判をする際には、コンクリートを1000mにわたり建設され一番苦しめられている当事者として、産卵が阻害された天然記念物の「アカウミガメ」や「赤江浜」も準原告として加え約100人の原告とともに訴訟に踏み切りました。

宮崎の科学者会議の弁護士にも協力していただいて、法廷の論争を通じて裁判の行方も頼もしいものになりつつあります。

宮崎の海岸を守っていく運動に関しては、日々手探りで進めていることもありアドバイスやご支援をいただけると幸いです。

そして、今、国交省は宮崎市北部の住吉海岸で、298億円かけてヘッドランド工法構造物を建設しようとしています。これは、宮城県や千葉県などで実際に建設され海岸侵食を止めることができていない構造物でもあり「ひむかの砂浜復元ネットワーク」で運動が広がっているところです。

行政も赤江浜の運動を通じ、署名やデモだけにとどまらず、座り込みや訴訟などまでされている経緯もあり住民との合意なしに進める事ができない状況にあります。

コンクリートによって護岸をすれば、さらにその先の海岸線が侵食され、また新たなコンクリートを入れなければならない。今日の海岸工学では自然と向き合うのではなく、だましだまし付き合っている状況です。実際、各地の海岸侵食に対する護岸で成功した例は、ほとんどありません。まさに予防注射を打ち続け更にひどい病にかかっているようにも見えます。

現状の到達点から異なった苦言や新しい発言をすると、研究者の間でも予算の問題や利権構造の問題もあり難しいと述べられる事もあります。これは、日本社会全体として自分の意見や思いを通さず我慢して全体の流れに合わせるのがいいとされるケースも多々ありますが、ぜひとも自由に物が言え新しいものにチャレンジする学生さんを社会にいっぱい輩出して言ってほしいと願います。

そして20世紀から今日に至るまで、平和の問題でも環境の問題でも世界で足を引っ張ってきている日本の現状がありますが、大きく転換して経済活動一辺倒から、平和の問題でも環境の問題でも世界でリードする日本へと変わっていくことを切に願っています。

2. JSA宮崎支部第4回読書会の報告

工学部 平野公孝

JSA宮崎支部は、会員をはじめとして多くの研究者間の意見交換を活発にすることを目的に、会誌「日本の科学者」に掲載された論文等を材料に読書会を始めています。その第4回読者会が、2009年1月30日に開催されました。会員外の研究者も含めて9名の参加を得ました。

今回のテーマは、松川康夫氏(JSA事務局長)によるレビュー「地球温暖化で問われるわが国の社会経済構造」(日本の科学者, 43-7(2008), pp. 366-371)です。チューターに、河内進策氏(元宮崎大学農学部教員)が務められました。河内氏からは、論文の各章に対応した補足資料およびコメントも含めた分かりやすいレジメが配られ、また、パワーポイントのスライドも使って論文の紹介がありました。

チューターからの報告を受けて、参加者からは多くの質問や議論が展開され、予定時間2時間があつという間に過ぎ去ってしまいました。特に、農学系や工学系の教員が多かったこともあり、今後の工業や農業のあり方、また、ルールなき資本主義の是正の課題等について大いに盛り上がりました。

また、経済専攻の会員外の参加者からは、社会経済構造に関する資料が提出され、労働の価値、資本主義的生産様式、人口減少等に関して問題提起がなされました。これについても多くの意見が交換され、分野を越えた参加者による意見交換の趣旨が十分満たされ、有意義で楽しい読書会でありました。



3. 第 65 回憲法と平和を考えるつどい—2009 年の世界と日本—金融危機と世界不況の中、日本の進路を考える—(友寄英隆氏(経済学者、「経済」誌、元編集長)

2月11日、宮崎市中央公民館で、宮崎民主法律家協会共催で、上記イベントを開催しました。参加者は約120名。

講演では、まず、今回の金融危機・世界不況は、「新自由主義の終焉」の時代が始まったと述べ、米国のこれら経済上の問題は、米国支配層の政治危機を促進し、政治の激動を起こし始めている—これがオバマ政権誕生の意味である。また日本でも、財界・大企業は派遣・期間工などの非正規労働者の解雇を強行しているが、雇用危機に対する反撃が国内外で広がっ

ている。今回の世界的な「金融危機・世界不況」は、21世紀の世界史の方向に関わる重要な歴史的意味を持っている。第1に、米国型「金融モデル」の終焉の始まり、第2に、米国の“戦後第Ⅱの繁栄の時代”の終焉の始まり、第3に、新自由主義的資本主義の終焉の始まりという3つの歴史的意味を持っている。

つぎに、講演では、「今回の金融危機・世界不況は、なぜおこったのか」について詳細に解説した。金融資本の本質を、信用論に立ち返って解説した。「米国型金融モデル」が破綻した3つの要因を指摘した。すなわち、①米国のドル体制の矛盾の累積とその限界、②新自由主義的資本蓄積の矛盾と限界、③米国型「金融モデル」の矛盾の累積と破綻から説明した。「金融危機・世界不況にどう対応するか」として、「市場原理主義」でなく、暮らしや産業・雇用を総合的に発展させる計画が必要なことを指摘しました。

最後に、友寄氏オリジナルの「年表・現在までの日本資本主義発達史の160年」1850～2010]を用いて、日本の変革の展望を解説した。すなわち、1850年代の明治維新による絶対王政復古下での発達と破綻、1945年代の敗戦後の変革と米国従属下での新自由主義的発達、そして現在の「新自由主義の終焉の始まり」という第3の激動の時代が到来し、日本改革の展望があることを述べた。しかし、激動の時代を変革の時代にしていくためには、そのための政策（理論）とその政策を実行する政治変革、その政治変革を実現する国民運動と組織が必要不可欠であると強調しました。

講演は、わかりやすく整理されたレジュメに沿って展開され、かつ独自にいろいろな文献から作成した貴重な統計データと図表、また日本資本主義発達史年表などを駆使しながら、難しい経済問題をわかりやすい言葉で話され、最後に今日の金融危機と世界不況から脱出する方策についても言及され、それは日本変革のチャンスであることを指摘した。総じて、非常に質の高い講演であり、参加者は、得るところ多く、勇気を与えられた。